

生活指導と支援ネットワークの自己産出

——「お礼」と「謝罪」をめぐる社会化実践から——

日本学術振興会特別研究員 (PD)・京都大学 佐藤貴宣

1 目的

本研究の目的は、小学校現場において障害をもつ子どもの通常学級への参加をデザインするに当たって教師たちが行う活動を分析することである。障害児の包摂に向けた学校現場での実践において現在主流となっているのは、事前に「障害児」を特別支援学級に分けた上で当該児童を「交流学习」や「統合」といった形で通常学級に組み入れていくというパターンである (三井 2015: 60)。本研究がフォーカスを当てようとするのもまた、特別支援学級籍の全盲児を「交流学习」の形で同学年の通常学級に参加させようとする教師の実践である。それらの考察から、制度的には通常学級の外部に位置づけられる障害児を、通常学級へと包摂していこうとする教師たちの実践とそこで用いられる論理や方法、その帰結について考察する。

2 データと方法

本研究ではゴフマンの儀礼論 (Goffman 1967=2002) に依拠する。とりわけ、クラスメートへの「お礼」と「謝罪」を障害児に対して徹底させようとする教師の指導実践に着目し、儀礼的行為へのコミットメントを重視する生活指導のロジックの分析を試みる。考察の対象は、全盲女兒 (C) に直接関わってきた教員 (S) へのインタビューによって得られたナラティブ・データである。Sは、Cが1, 2年次の支援学級担任であり、通常学級にCが参加する際には加配教員の役割を担っていた。Sへのインタビューは2014年6月21日にSの自宅で行われた (面接時間は約2時間半)。

3 結果

“誰かとぶつかったときには真っ先に謝罪せよ”という一見理不尽な指導が、子どもの集まりにおけるメンバーシップを固守し、教室の相互行為秩序の内部にCをかりうじて留め置くための窮余の策として実行されていた。また、支援提供児への謝意を表明する一連の提示儀礼によって企図されていたのは、Cを被支援者カテゴリーへと同一化させ、子ども同士の社会関係の内部に被支援者カテゴリーの担い手としてCを埋め込むことにより、クラスルームにおける彼女のポジションをより盤石なものとしていくことであった。

4 結論

Cに謝罪とお礼を習慣化させようとする教師の指導は、学級の内部に友好的かつインフォーマルな支援ネットワークを自己産出していく主体へとCを社会化する。しかし、それは、クラスメートの自発的な善意によってCのケアを回していこうとする点において、Cに対して障害者役割を付与することと不即不離の関係にある。この点を踏まえたとき、本研究の考察から導出される中心的な知見は、包摂指向的な実践が、排除の方向へと反転する可能性を内包するという点、あるいは、“障害児のいる学級”のリアリティを構築していく実践それ自体が排除へと至る契機を胚胎している点にある。

[文献]

- Goffman, Irving, 1967, *Interaction Ritual: Essay on Face to Face Behavior*, New York: Anchor Books. (=2002, 浅野敏夫訳『儀礼としての相互行為』法政大学出版局.)
三井さよ, 2015, 「就学運動から学ぶもの」『支援』5: 59-72.